

議事録

主な課題	表敬及びチーム派遣評価ミッションの説明
訪問先名(場所)	日本大使館
日時	2001年11月19日(火) 16:00-17:00
面会者	上野氏(二等書記官:農水省より出向)
調査団出席者	伊藤代理、引場シニア(酪農開発プロジェクト)、高野(記録)

協議内容

本件ミッションの目的、調査日程について説明を行った。上野書記官からは概ね以下の助言をいただいた。

助言・総括

・調査に関する視点、新規案件である酪農開発プロジェクトに対する提言として以下があげられた。

- 本件ミッションの目途、位置づけ、調査日程については了解。
- 国家開発計画の中での酪農開発プロジェクトの位置づけ:国家開発計画の中でのUNAIPの位置づけ、UNAIPの中での酪農開発プロジェクトの位置づけを明確にすべきである。そうでないと、家畜人工授精強化プロジェクトから酪農開発プロジェクトへの支援の意義が明確にならない。
- 専門家とJOCVの連携のしくみ:連携の仕組みを議論すべきである。連携のきっかけづくりのためにJICAや大使館がお膳立てを行うのは必要であり、実施する用意がある。

議事録

主な課題	フィリピン家畜人工授精強化プロジェクトの現地支援体制
訪問先名(場所)	JICA フィリピン事務所
日時	2001年11月19日(火) 11:00-12:00
面会者	木下 秀俊氏 (水牛・牛改良計画シニア隊員)
調査団出席者	伊藤代理、宮下 (JICA フィリピン事務所)、高野 (記録)

協議内容

95年4月～97年6月までフィリピン家畜人工授精強化プロジェクトのシニア隊員を努めていた同氏に、主として同プロジェクト期間中の隊員のマネジメントと現地支援体制の課題を聞き取りした。まず冒頭に引場隊員がコメントした自立発展性に関する現況に関する理解を説明し、概ね両者が共通する認識を持っていることを確認したが、液体窒素を州が製造し、これを Province に配布 (およそ P50/l で) することで自立発展を確保するという考え方について引場シニアとは意見が異なり、業者から購入した方が良いのではないかという考え方であった。

(1) 5項目評価関連の補足情報

・引場シニアからのコメントに加えて以下の関連情報を収集した。

- JOCV-PASA は、当初 20 名程度で創設されたが、現在では 200 名以上の会員規模となっている。全国的に展開されており、現在では大臣に予算を陳情する政治機能を持つに至った。会費は年 P1,000 程度で、幹部は 1 年ごとに選出されている。規模は拡大傾向にあり、プロジェクトの残した大きなインパクトして位置づけられる。パンフレットや会報も定期的に出しているが、畜産の薬剤・設備関連の会社から広告収入や寄付を得られるまでになった。
- BAITA (ブキッドノン家畜人工授精師連合) は、日本に研修に行った人が多く、知識も高い。22 の Municipality 全てに人工授精師がいる。
- 液体窒素の調達については、上述の通り、業者から調達した方が良いのではないかと考えている。
- JOCV の活動と方針を手本に、現在 BAI では Unified National Artificial Insemination Program (UNIP) を創設し、来年度から施行することになった。これは協力隊の活動を手本に、この活動の手法を全国展開しようとするものである。更に、従来、カラバオ、乳牛、肉牛によって扱う組織が異なっていたが、人工授精への取り組みについては組織の壁をはずす、人工授精師の資質を定義することによって将来の資格制度への足がかりを作る、液体窒素や消耗品の予算措置の在り方を定義する、等に眼目が置かれている。

(2) 隊員マネジメントで心がけたこと

- ・ザンビアの理数科プロジェクトから、リーダーが予算配分を隊員に説明しないと、隊員が投入する資機材をイメージできない、との教訓を受け継いだため、メンバー全員を集めてこれを実施した。派遣地が4つの州にまたがっていたので、各地域が個々の実状に合わせてプロジェクトを実施するためにこれが非常に役立った。
- ・リーダーシップについての考え方は以下の通りである。
 - コミュニケーション能力：相手に自分たちの活動を適格に説明できるコミュニケーション能力は必須の条件である。
 - 影響力：プロジェクトの立ち上げ時には、相手国政府や JICA との折衝が密になるため影響力のあるリーダーが必要だが、それ以降はあまり必要な資質ではないと考えている。
 - 権限委譲：特にプロジェクト地域が分かれている場合、それぞれの地域に権限と責任を与えることが必要であり、財務的な裁量権、技術判断の裁量権を与えるべきである。
 - 失敗許容：協力隊事業のボランティア性を重視し、チーム派遣のリーダーは隊員の失敗に対して苦情を呈するべきではない。
 - 成果の評価：チーム内部で実施する機会を作り、リーダーがこれを組織する。内部評価を行う場合、必ずしもチーム内で数値目標を設定する必要はない。数値で判断すると隊員の活動が画一的になり、ストレスがかかる。

(3) 現地支援体制（現地業務）の改善点

- ・現地支援体制や現地業務に関する項目についてそれぞれ課題を聞き取りした。
 - 任地訓練：日本での聞き取りで訓練所からの要望として、現地訓練で語学訓練以外に、当該国の経済事業やプロジェクトの位置づけについて派遣後ある程度の時間が経った段階で実施したらどうか、という提案がだされていることを言及し、それが望ましいとの回答を得た。時期については、一律に隊員総会を利用する他、場合に応じて隊員ネットワークの有志が自発的に JICA 事務所に開催を要望できるような体制が望ましい。
 - 巡回指導：適切な回数であると思うが、当該プロジェクトの場合、1) C/P 機関に技術力があって隊員が C/P から教わることも多かった、2) 新しい技術が登場する頻度がさほど高い分野ではない、こともあって本部が実施する巡回指導にはあまり期待してはいなかった。
 - レポートニング：頻度については問題なし。但しフォーマットについてはもっと自由記述欄が少ない。
 - 機材調達：定型化された手続きがなかったため、経理が煩雑になる。
 - 予算確保・執行：リーダーは大変だが、あれで精一杯なのではないか。
 - 安全対策：問題なし
 - 任国外研修：問題なし

- 事務処理：本件のようにサイトが分かれている場合、格差が出てしまう。プロジェクトによって事務処理手続きが異なるため、内部で事務処理の手順を標準化する必要があった。
- 評価：ボランティアであるが故、プロジェクト技術協力と同じ視点で評価するのはおかしい。

特記事項・総括

- ・ チーム派遣に対する提案として以下があげられた。
 - リーダーの選定：コミュニケーションの能力、権限委譲を行い、失敗を許容する人間性、プロジェクトの立ち上げ段階における影響力などが重要な資質である。そのためには、リーダーのガイドラインを特別に作成する必要がある。
 - リーダーの活動：活動場所が分散している場合には、各拠点にある程度の権限委譲を行うと共に、隊員全員にプロジェクトの位置づけや予算規模を説明し、投入量をイメージさせる機会を設けることが重要である。更にリーダー自身がチーム派遣の意義を「自分なり」に理解している必要がある。
 - 計画段階で予測できなかったインパクト：終了時評価段階では発現していなかったインパクト（JOCV-PASA の成長、JOCV の活動が基盤となって形成された国家計画）については、「フォローアップ調査」を創設し、これを実施すべきである。
 - 任地訓練で任国事情をレビューする：派遣後一定期間経過した段階で、任国事情をレビューする機会を設けるべきである。隊員総会等の機会を利用すると共に、有志による勉強会開催のリクエストに対して JICA 事務所が対応できるようにすべきである。
 - レポート書式の改善：自由記述欄を増やし、隊員の目標外の活動に対しても注意を払うべきである。
 - 評価手法の検討の必要性：チーム派遣についてはボランティアの側面も担保されなければならないため、プロジェクト技術協力と同様な評価方法が本当に適切なのかを議論する必要がある。

議事録

主な課題	フィリピン家畜人工授精強化プロジェクトの成果
訪問先名 (場所)	マライバライ種畜牧場
日時	2001年11月21日(水) 9:30-12:00
面会者	フィリピン家畜人工授精強化プロジェクト C/P 計8名
調査団出席者	伊藤代理、引場(酪農開発プロジェクト)、高野(記録)、Tito T Oria, SR(現地コンサルタント)

協議内容

先に作成した現地調査質問状にそって討議を行った。主な論点は以下の通り。冒頭 NABC 代表より概況について説明を受けた後、JOCV 以外の外国援助の経緯を聞き取った。特にオーストラリアが実施した、Forages for Small Holders Project (オーストラリアの技術援助)、Peace Corps.の活動などが紹介された。また NABC は、優良精子確保のため、将来的に 200 頭のブラマン種の導入や和牛種の導入を計画している。NABC の主な役割は、家畜繁殖に関する調査・研究、AI の普及等である。普及については、ラジオ放送(地元では毎日 1 時間の時間枠がある)、ビデオ、ポスターを活用している。広報予算は年々増加しており、普及活動が徐々に拡大しつつあることを確認した。

(1) 諸外国の援助状況と NABC での本件の位置づけ

- ・オーストラリアの実施した Forages for Small Holders Project は、新種の牧草を導入するプロジェクトで全国 5 カ所で展開された。傾斜地農業や小規模農家のための新種の牧草導入などの提案と併せて、牧草地形成のための生産資材の供与や第三国(インドネシア)研修などが実施したが、供与額が少なかったこと、傾斜地農業の提案が実用的でなかったことにより、さほどの評価を得ていない。
- ・Peace Corp の評価は良いとは言えない。高慢な態度で言葉を覚えようとせず、なかなか現地になじめないと評価されている。
- ・協力隊の成果については、かなりの高評価がなされている。生活の全てでフィリピン人と密着して活動していたことから、適応力があり、現地に大きな貢献をする存在として認識されている。
- ・日本人のボランティアの特徴として、勤勉性、C/P との相性が良い、時間厳守が挙げられた。

(2) チーム派遣が残したもの

- ・プロジェクトの持続的発展に資する仕組みとして以下を確認した。
 - 参加者の費用負担によるトレーニング: LGU の人工授精師養成のトレーニングでは、参加者(主に LGU の職員)からも費用負担を求めている。トレーニング費用は NABC が負担するが、交通費、食費等は LGU が負担することになっている。
 - 液体窒素の販売: 施設内で製造された液体窒素を P50/l で LGU に販売している。ここでも LGU が農家に対して実施する AI サービスについて P50 の課金を行っている LGU が既

に存在していることを確認した。

- ▶ チーム派遣と個別派遣のスキームの区分については明確ではない。種畜牧場には現在も個別隊員が入っているため、チーム派遣プロジェクトが終了していることは理解できてもスキームの違いを理解するには至っていない。
- ▶ 国も AI に対して理解を示すようになり、牛に与える栄養剤や職員の出張旅費の予算が増加したことが大きなインパクトである。但し今後 AI のデモンストレーションを見せるためにはジープニーが必要であると考えている。
- ▶ 先に挙げられた時間厳守の習慣は継承され、チームが関わった C/P や農家は（他の地域に比べて）時間厳守が行われている。
- ▶ 広報用ビデオは、日本人の隊員とフィリピン人 C/P の合作であり、これは全国の AI プロモーションのツールとして使われている。広報活動の際には当該ビデオは日本人が作成したことを必ず言及している。フィリピン人ではできないコンセプトの伝達や、カメラワークを用いており（これについては疑問）、技術的にも優れている。

（3）求められる人間像

・チーム派遣に求められる隊員の人間像は、研究所とフィールドで異なる。技術力はあるに越したことはないが、無い場合でも C/P が教授する体制ができているとコメントされた。人間的な弱みもある人の方が接しやすいとのことである。

- ▶ 研究所：仕事に対して厳しく、成果重視の人材が求められる。一方適応できない人材は、仕事に対して甘く、成果を省みない人間。やる気のない人も敬遠される。
- ▶ フィールド：厳しい人材は敬遠される。言ったことは守りながらも、人生を楽しみ、喜びを農家と分かち合える人材が好まれる。

（4）隊員気質の変遷

- ・1980 年代の隊員は、スキルがあったが保守的であった。但しその理由としてカラオケでエルビス・プレスリーを歌っているから、というだけの理由であったので、実際「保守的」が短所であるという見方はしていないと考えられる。
- ・近年派遣されてくる隊員は活動的で自分をさらけ出す人が多い、とのコメントがあった。これについても個別の人材を意図している傾向があり、一般的な意見とは言い難い。

（5）隊員の評価

- ・隊員の評価は C/P 個々で実施しているが、これを文書化して本人に提出するような大げさなことには反対で、口頭で注意を促す程度が最も望ましいとするのが共通した意見。日本側についても JICA へ提出する文書で C/P を評価するのではなく、まず話し合いによる意志の確認をすべきだと考えている。

特記事項・総括

- ・チーム派遣に対する提案として以下があげられた。
 - ▶ 「社会的認知」担当隊員の必要性：AI サービスの社会的認知が必要になってきており、

Social Research を専門とする隊員が必要になってきた。今後のチーム派遣では、この分野の隊員を組み込んでくれるよう期待する。オーストラリアの援助でもそうであったが、Social Research 担当隊員は大きな功績をあげた。

- ・他国の援助と比較して JOCV の協力に対する評価が圧倒的に高い。ほとんどの職員が日本研修を行っており日本語、日本人に対しての理解が他の政府機関に比べて相当高いと考えられる。組織を活性化している源泉は「日本での研修」であったと考えられ、チーム派遣プロジェクトの研修の投入は大きな成果を上げているものと考えられる。
- ・NABC の人事が明らかにチーム派遣プロジェクトを念頭において行われており、チーム派遣というスキームに対する理解度は低くとも、プロジェクトの運用に対する理解は高い。

議事録

主な課題	チーム派遣プロジェクトの成果について
訪問先名（場所）	セブ農業省リージョン7事務所
日時	2001年11月23日（金） 10:00-11:00
面会者	Mr. Isaac Macasero, Department of Agriculture（元三島シニアのC/P）、Mr. Rudito C. Mumar (ITI), RAIC/Chief Lab c, Department of Agriculture
調査団出席者	高野（記録）

協議内容

セブ州の DA で AI 業務の責任者となっている Mr. Macasero, Mr. Mumar の両名にチーム派遣の成果について聞き取りを行った。

（1）R7 の状況

- ・R7 は現在 120 強の自治体から構成されている。現在 R7 には 57 名の人工授精師がおり、そのうち 33 名が専属で活動している。1 名は NGO で自ら研修費を出して AI のトレーニングを受けた。
- ・現在の R7 の開発重点はインフラ整備に置かれており、農業には置かれていない。
- ・AI サービスについては、既に P50 でサービスを提供している。地区がいくつかある。Bacong, Ming, Negros Oriental, Lazi City, Siquijor などがこれに当たる。
- ・現在 R7 の窒素製造器は故障中。触媒として使われるヘリウムガスが無くなってしまったのが原因で、これを入れ替える必要があるが、現在十分な財源が確保されていない。引場隊員は、酪農プロジェクトでヘリウムガスの補填を検討中。

（2）協力隊チーム派遣の成果について

- ・AI を行った乳牛からは従来の 3 倍の乳量が得られるようになった。
- ・日本への研修で日本人の勤勉性、優れた施設と技術力、日本の文化についての見識を高めることができた。研修派遣される人材の年齢制限が 40 歳と決められているのが残念で、やる気のある多くの人材が年齢制限で研修に行くことができなかつたことが残念であった。
- ・JOCV の人達は夜遅くまで熱心に仕事し、緊急時には夜中でも農家に行くことがあった。ボランティア精神には非常に感心し、今でもそれに近づこうと努力している。
- ・アメリカやオーストラリアのボランティア団体に比べて日本のボランティアは圧倒的に優れていると思う。機材についても適切なものが提供されたし、到着時期についても適切だったと思う。

（3）相互理解

- ・JOCV のメンバー（Isaac Macasero は三島シニアの C/P）とは非常に深く交流できたと感じている。
- ・メンバーの素養として必要なのは①語学力、②人の話を聞く姿勢、③Community Organizing の

スキルであると感じている。逆に人の話を聞かない人、体が動かさない人は不適合である。

議事録

主な課題	個別派遣とチーム派遣の違いについて
訪問先名（場所）	セブ農業省 R7 事務所
日時	2001年11月23日（金） 12:00-13:00
面会者	社内 憲男隊員（現在 NDA の傘下の酪農組合に家畜飼育の個別派遣として派遣中）
調査団出席者	高野（記録）

（1）現況

- ・現在は NDA が支援する酪農組合に派遣され、外国人向けに牛乳を売っている。派遣先で期待されていることと、自分の専門性が異なっていることに若干のとまどいを感じている。個別派遣といえども計画段階でもっと活動内容を明確にして欲しかった。
- ・また JICA 事務所でも隊員の活動内容と計画が整合しているかを定期的にチェックして欲しい。
- ・牛乳を売るため日本人とのつきあいが多く、マニラで仕事をしているのときほど生活環境は変わらない。そのため、フィリピン人より日本人とのつきあいが増えた。
- ・牛乳製造施設は、あまり調子が良くはなく、いつか問題が起こることが心配。品質改善、冷蔵施設の整備、施設の老朽化への対応が課題となっている。（この後、引場隊員が派遣先を視察し、機械不調の原因は洗浄水に含まれるカルシウムが機材に付着することによってパイプ内が不衛生になっていることが判明し、今後対応策を検討することを約束した）。
- ・週末は日本人学校の教師をボランティアで実施している。

（2）チーム派遣、個別派遣の違い

- ・チーム派遣については十分な知識を持っていないが、協力隊員のネットワークの中では、チーム派遣はお金を使える代わりに、同じ派遣先に専門性の類似した隊員が複数入ると摩擦が生じやすいという風評が立っている。

議事録

主な課題	JICA 事務所、調整員の役割について
訪問先名 (場所)	JICA フィリピン事務所
日時	2001年12月5日(水) 16:00-17:00
面会者	宮下調整員 (JICA フィリピン事務所)、引場シニア (酪農開発プロジェクト)
調査団出席者	高野 (記録)

協議内容

現地調査結果を踏まえ、宮下調整員あて質問状を作成し、e-mail で送付した (11 月 24 日)。現地調査期間中の飛行機がキャンセルされたこともあり、直接話を伺うことができなかったため、この質問状に基づいて協議を行った。

(1) 最近派遣されるチーム派遣隊員の特徴はなにか。

BAI の Mr.Dumangas、R10 の C/P の面々がご指摘の通り、最近の隊員の方が Aggressive な人が多く、昔の隊員の方が「昔気質」の人が多かった、ことは実感である。引場シニアは、最近の人は自立の気概が乏しい、とか道筋をつけてやらないと活動できない、というコメントを付けているが JICA 事務所としてもこれを感じている。昔の隊員はルールが引かれているのがいやだったが、今の隊員は方向性が見えるものでないとだめで、自分でできる活動を自分で探すということをしていない (あるいはできない) 受け身の姿勢である。これは男女間に格差はない。一方、今の隊員は、ルールが敷かれている中での活動には非常に強い。ここから得られる教訓は以下の通りなのではないか。更に評価されることには慣れており、自分の成績を常に気にする (これは訓練所からの聞き取りと付合する)。

- 1) チーム派遣プロジェクトは現代の若者の特性から言って非常に効果を上げやすいスキームである。
- 2) そのためにより精緻なルール (計画) をあらかじめ敷いておく必要があり、ルールがうまく敷かれていれば、効果は今まで以上に期待することができる。
- 3) 更に計画が精緻であればあるほど評価もしやすく、これも現代の隊員気質に合致する。

(2) 相互理解、人材育成を促進する効果的な「投入」とは何か。

C/P 組織が活性化している場合、その背景に必ず「中心に共有されている資源」があり、家畜人工授精強化プロジェクトにおける C/P 機関側の共有資源とは「日本での研修での共通体験」である、というコンサルタント考え方は正しいと考えられる。「研修地と研修テーマの一貫性、継続性を可能な限り確保すること」は重要な提案である。更に引場シニアから研修の内容は、チーム派遣隊員がフィリピンで実施しているのと同様、被派遣者にとっては日本におけるボランティアであった、とコメントをいただき、参加者で議論したところ、「フィリピンでは人から受けた「恩」

は必ず返すというのが美德と考えられており、日本で受けた恩をフィリピンでチーム派遣隊員に返せるということで、C/P 機関の社会的意識も向上し、それが組織の活性化につながったのではないか」という結論に至った。

(3) 理数科プロジェクト、人工授精強化プロジェクトの比較

理数科プロジェクトの場合は、3 サイトに常時 3 名がアサインされていたので、日本からの支援が受けやすいことが特徴であった。但し、福田シニアが指摘されたとおり、教員の世界は女性の社会であり、チーム内での比較、他の先生との比較等がなされ、活動としての自由度は低く、内部的な難しさはあったのではないかと感じられた。一方、家畜人工授精強化プロジェクトは「男の社会」であった色彩が強く、各州で個人が活動していることから活動の自由度は高かったが、個人が分散していることで本部からの支援や活動費の分配などでの物理的な限界があった。

(4) チーム派遣事業での HQ との一貫性という意味で未整備の部分は何か。

フィリピン事務所でもかつて日本で言われてきた活動の位置づけとフィリピン事務所でも指示された活動の位置づけが異なる、と指摘されたことがあった。調整員としてはこのような食い違いを防ぐために、応募者が最初に見る応募調書の段階でプロジェクトの背景等を書き込んでおくことを実施中である。訓練の中で任国研修については、更に細かなテーマ設定（例えば安全対策、セクタープラン等）が必要であると思う。但しこれらは現地訓練で実施すべきことも考慮すべきである。特に任国研修については講義のタイトルだけでなく実際の講義内容を調整員あてフィードバックして欲しい。

(5) 個別派遣、チーム派遣の案件形成はそれぞれ誰が行うべきと考えているか。

家畜人工授精のように派遣されていた隊員自らが、次の案件を創設し、これを実現するというのは理想であっても、属人的能力に依存せない部分もあり、どのチーム派遣もこれができるわけではない。更に引場隊員によるとこの案件形成の活動に任期終了直前 3 ヶ月間の時間を費やしたと言うから、どのチーム派遣でもこの手順で次期の案件形成を行うことはほぼ不可能である。従って優良な案件を発掘するためにはある程度のプロセスを定型化しておく必要がある。また、酪農プロジェクトに従事している引場シニアの場合、前任者との引継時間がほとんどなかったことも既存の案件形成プロセスの弱点である。

参加者で討議したところ、以下の案が有効なのではないか、という結論を得た。コンサルタントは日本でこれを報告することを約束。

① チーム派遣終了前 1 年ほど前に提出するレポートにチームからの報告内容として「現在実施中のプロジェクトはどのように発展させていったら更に有効になるか？」ということ報告させる（どの報告書で何を報告するかは JICA がある程度決定できるはず）。ここで次に発展的に展開されるであろうチーム派遣案件の玉をださせる。

②これによって少なくともチーム派遣終了 1 年前までには、次のプロジェクトの候補が JICA 事務所の調整員の知るところとなる。この時点から調整員はこの情報を元に、派遣隊員、C/P 機関、と詳細を詰めていく作業を開始する。この作業はチーム派遣が終了する半年前程度まで実施し、有望で継ぎに日本が実施するチーム派遣については、この段階でボランティア受入れ管理機関であるボランティア調整局 (PNVSCA) の審査を通しておく。案件内容を具体的に詰めていく作業の過程で、調整員が多忙を極める、あるいは技術的バックアップが必要な場合は、JOCV ニュースなどを使って当該チーム派遣プロジェクトの OB/OG 等を短期間募集し、案件を詳細に詰める作業に従事させる。

③チーム派遣が終了するまでにこの要請を出し、人材を公募する。正式にプロジェクトを実施する場合は、新規チーム派遣で採用されるシニア隊員とプロジェクトを創設したシニア隊員の任期を 2 ヶ月程度重複させる。

(6) 特記事項

ボランティア調整局 (PNVSCA) は近年非常に頼りがいがあり、機能が充実してきた。ここの機能が充実することにより、C/P 機関自身も活性化している。PNVSCA は、現在ボランティア拠出機関の決定、拠出されたボランティア受入機関への助言等を行っているが、PNVSCA のトップが変わってから機能が強化されたとのこと。同局は政府機関からボランティア派遣要請を受けるとまず自らが現場に赴き、業務の内容、安全性、要請の背景等を調査し、要請先を決定する。更に派遣された全てのボランティアから活動報告書 (英語版) を求め、C/P 機関や C/P に対してのクレーム等を発見すると自らが調査を行い、改善点を促すような実践的な活動を行うようになった。これによって同機関の監視機能が強化され、C/P 受入機関、C/P 自信がボランティアの日頃の活動に注意を払ってくれるようになった。

隊員の任期延長については、本部で延長が認められた場合、認められなかった場合の双方について、調整委員の方から直接隊員にその理由を説明している。但し、この件で本部と意見が食い違う場合も多い。これに対して延長条件のクライテリアを更に明確にできないものなのかを本部に確認することとした。

**INTERVIEW WITH THE BUREAU OF ANIMAL INDUSTRY (BAI) AND THE
NATIONAL ARTIFICIAL BREEDING CENTER (NABC)
ON THE PROJECT TITLED
THE STRENGTHENING OF THE NATIONAL
ARTIFICIAL INSEMINATION PROGRAM (NAIP) .**

The Mission Team composed of Messrs. Kozo Ito, Masashi Takano, Masanori Hikiba and Tito T. Oria, Sr. held the meeting at the NABC Central Office in Quezon City at exactly 2:00 P.M., initially at the office of and with the NABC National Director, Mr. Pete Dumangas. It was later moved to the office of BAI Assistant Director, Dr. Victor C. Atienza.

Hereunder are the excerpts of the statements made by the concerned authorities:

On Team Approach compared to Individual Dispatch of Volunteers —

The team approach is far better compared to the individual dispatch of Volunteers because thru quarterly and annual program review, the Volunteers as a group, and their respective counterparts are able to thresh out operational bottlenecks and agree on how to effectively address these problems. Individual dispatch of Volunteers are limited to their own perception and observations of the situation they are in. They are likewise overwhelmed by the number of their local counterparts and the need to get accustomed to the environment where they are assigned. These advantages have been explained to NEDA.

Assessment on the performance of the Volunteers —

These JICA/JOCV Volunteers although still young, are very willing to impart their technical know-how and are also willing to learn the culture of the host country. Their untiring commitment to do their job/tasks at hand is beyond doubt.

On sustainability —

As a result of the project, even 5th and 6th class municipalities now regularly appropriate funds for the purchase of LN₂ to be used by their trained AI technicians ultimately improving the quality of large ruminants owned by small farmers. At the moment, there is a move to set up LN₂ plant in each region.

Impact of the Project —

One concrete achievement of the project is the fact that it contributed worth Php 171M to offspring value compared to the project investment of Php 82M. And, the project is still on-going.

Project Termination —

AI implementation in the past several years had a very low acceptability among farmers because animal dispersal was the primary thrust of the Government of the Philippines (GOP). When farmers fail to re-disperse, the government just ignore the violation. These past few years, AI has been gaining acceptability and therefore needs to be sustained. Once the AI get nationwide acceptance among farmers and LGU officials, maybe then, termination could be considered and leave the GOP to continue the project.

2nd meeting with the Department of Agriculture (DA) Region X

Assistant Director Dr. Martino N. Kajita, Messrs. Constancio Maghanay (Superintendent of Malaybalay Stock Farm or MSF), Leo Osalvo (Regional AI Coordinator), and other staff at 9:45 A.M. on November 20, 2001.

Following are excerpts of the statements made by the concerned GOP authorities:

Other foreign-assisted project —

The MSF has an on-going technical assistance from the Government of Australia on Forage and Pasture, and some planting materials for trial and research.

Charging Fees to AI services —

At present, the DA is not charging the farmer-cooperators any fees since the project is still on a trial basis. However, now that the project is gaining acceptability both with the farmers and LGU officials, maybe charging farmers Php 50.00 to Php 100.00 can be proposed to generate funds for the maintenance of the LN2 plants.

Farmers attitude towards Japanese Volunteers —

The JOCV Volunteers were able to foster harmonious relationship with the GOP counterparts and some farmers where they lived to learn Filipino cultures/values. The volunteers also learned a lot from the Filipino farmers. During the entire duration of the program, only one Volunteer was sent home for personal reasons but a replacement was immediately sent by JICA/JOCV.

Volunteers Competence —

Volunteers willingness to learn the local dialect, stay in farmer s homes, and very good flexibility on top of some technical experience are some of the desired qualities of a Volunteer.

Team Dispatch —

Is better simply because more heads are better than one. A team covers different technology/ more areas.

Screening/ selection of Volunteers —

The DA screened the background of each Volunteer and matched his capabilities to the needs of the place where he will be assigned.

Weakness/es of Volunteers/ Senior Volunteers —

The Volunteers have performed very well. The problem is more of geographical- the area is too large to be covered in two (2) years.

Duration of Assignment —

A Volunteer is assigned to a particular office/ place for a period of two (2) years which is too short specially if the Volunteer is very good at his job.

About the Senior Volunteer —

Senior Volunteers conducts monthly monitoring, and are invited during quarterly and annual consultation meetings. His role is to look at the macro-level (other pilot areas).

Extension of Service —

At present, one Volunteer is giving a lot of help. Is it possible to extend her services (Ms. Tomoko Suzuki)?

Termination of Assistance —

A challenge has been extended to all technicians to continue with their job and these technicians have been responding very well. Cost sharing with the LGUs is being implemented. Incumbent Trainors are former Trainees trained in Japan and locally. The LGUs have bought their own field tank. There is a proposal to charge farmer-cooperators Php 100.00 for each calf-drop to be given as incentive to the Technicians

On future plan —

A proposal titled Unified National Artificial Insemination Program (UNAIP) is now being finalized.

Focus group interview with about eight (8) former trainees

at 1:30 P.M. on November 21, 2001 at the National Artificial Breeding Center (NABC) in Malaybalay, Bukidnon.

Below are excerpts of the statements made by the concerned respondents —

Benefits of having a Volunteer —

Acquire additional knowledge from the Volunteers, they show good reputation, they are workaholic, they don't look down on Filipino technicians and farmers. They easily learn Filipino values and willingly share Japanese culture and values.

Assets of the Volunteer —

The Volunteers are generally aggressive, workaholics, strict but accomplishment oriented, balanced rigidity or strict in the office but can deal with local people when on field.

Influence of Volunteers —

The character of these young Volunteers has influenced our own